

濱口梧陵シンポジウム開催報告

— 銚子の偉人の功績と千葉科学大学の教育研究方針とのアナロジー —

Report on the Symposium on Goryo Hamaguchi

— Analogy between Achievements of the Great Person in Choshi City and Educational Policies of the Chiba Institute of Science —

木村 栄宏¹⁾・藤本 一雄¹⁾・伊永 隆史²⁾・室井 房治¹⁾

Hidehiro KIMURA, Kazuo FUJIMOTO, Takashi KORENAGA, and Fusaji MUROI

本研究では、まず、千葉県銚子市の偉人の一人である濱口梧陵の防災・防疫の面での功績を再認識し、それと千葉科学大学の教育研究方針との類似性を指摘する。その上で、濱口梧陵の防災・防疫面での功績を学内外に広く周知するとともに、現代の我々が将来の大規模な災害や未知の感染症に対してどのように備えるべきかについて考えるきっかけとすることを目的としたシンポジウムを企画・開催したので、その結果について報告する。

1. はじめに

2011年の東日本大震災では、おもに東北地方太平洋沿岸を襲った津波によって約1万9,000人の犠牲者が生じた。我が国では、近い将来、南海トラフ巨大地震、首都直下地震の発生が懸念されており、最悪の場合、それぞれ約32万3,000人、約2万3,000人の死者の発生が予測されている。また、2014年は、海外（西アフリカ）においてエボラ出血熱が流行し、約1万1,000人の死者を生じた。国内では、デング熱の感染が70年ぶりに確認され、国内での感染症の脅威も高まっていると言えよう。過去、このような国難レベルの脅威に対して立ち向か

った人物の一人に「濱口梧陵」がいる。濱口梧陵は、江戸時代（1645年）創業のヤマサ醤油（本社は現在も千葉県銚子市）の第7代当主であるが、防災・防疫の面でも優れた業績を残している。詳細は後述するが、防災の面に関しては、1854年安政南海地震の津波から村民を避難誘導した逸話として有名な「稲むらの火」のモデルである。また、防疫の面に関しては、1858年に江戸でコレラが流行した際、銚子でのコレラ防疫に尽力するなどしている。

現在、著者らが所属する千葉科学大学（所在地：千葉県銚子市）は、危機管理学部、薬学部、看護学部で構成されており、「人を助けたい、という人の大学」を標榜している。前述の濱口梧陵は、千葉県銚子市との縁が深いだけでなく、防災・防疫のためにも尽力した人物であることから、その功績は本学の教育研究方針とも合致していると言える。

以上を踏まえて、まず、千葉県銚子市の偉人の一人である濱口梧陵の防災・防疫の面での功績を再認識し、それと千葉科学大学の教育研究方針との類似性を指摘する。その上で、濱口梧陵の防災・防疫面での功績を学内外に広く周知するとともに、現代の我々が将来の大規模な災

連絡先：藤本一雄 kfujiimoto@cis.ac.jp

1) 千葉科学大学危機管理学部危機管理システム学科

Department of Risk and Crisis Management System, Faculty of Risk and Crisis Management, Chiba Institute of Science

2) 千葉科学大学危機管理学部環境危機管理学科

Department of Environmental Risk and Crisis Management, Faculty of Risk and Crisis Management, Chiba Institute of Science

(2015年9月25日受付, 2016年1月6日受理)

害や未知の感染症に対してどのように備えるべきかについて考えるきっかけとすることを目的としたシンポジウムを企画・開催したので、その結果について報告する。

2. 濱口梧陵の略歴・功績

濱口梧陵の略歴・功績については、文献1)～3)を参考にして、以下に簡単に紹介する。

濱口梧陵(ヤマサ醤油7代目)は、1820年に紀州の広村(現・和歌山県広川町)で生まれ、12歳のとき銚子に來た。1854年の安政南海地震(死者数千人)のときは広村にいて、その津波から村民を救うため、収穫した稲むらに火を放ち、高台へ導く避難路を示したおかげで多くの村民が津波から逃がれることができた。この逸話は、「稲むらの火」として国語の教科書にも掲載されている。その後、津波で住まい・仕事を失った村民を救うため、また、将来の津波から村を守るため、私財(銚子の醤油醸造業で得た資金など)を投じて村人を雇い、彼らの手により高さ5m、長さ600mの堤防(現在は国指定史跡「広村堤防」)を建設した(図1)。それから約90年後、1944年の昭和東南海地震および1946年の昭和南海地震のとき、津波が再び広村を襲ったものの、堤防のおかげで少ない被害で済んでいる。

また、1858年に江戸でコレラが流行した際(江戸だけで死者10万人との説あり)、銚子で医院を開業していた関寛斎を江戸の西洋種痘所(後の東京大学医学部)に赴かせて、コレラの予防法を学ばせ、銚子でのコレラ防疫に業績をあげた。その西洋種痘所が焼失すると、1859年に梧陵は種痘所の再開のために多額の寄付をしている。

さらに、梧陵は、佐久間象山、勝海舟、福沢諭吉など多くの知識人と広い交流を持ちながら、1871年には初代の駅通頭(現在の郵政大臣に相当)と和歌山県大参事

に任命され、1879年に初代の和歌山県議会議長に就任した。その後、1884年には、念願の欧米諸国視察のため横浜港を出帆したものの、翌年(1885年)ニューヨークで客死した。なお、梧陵の死後、「梧陵濱口君紀徳碑」が銚子市内に建立されたが、その碑文は梧陵の死を悼んで勝海舟が捧げたものである(図2)。

3. 千葉科学大学の教育研究方針

本学は、社会が最も求めている安全・安心な生活を創り守るための危機管理を学ぶ日本初の「危機管理学部」と安全・安心な社会の基礎となる薬学を学ぶ「薬学部」によって、2004年度に設立された大学である。さらに、2014年度には健康で安全・安心な生活の確保に寄与する看護学を学ぶ「看護学部」が設置された。ここで学ぶ学生には、対象となる学問特性も踏まえ、豊かな人間性に支えられた豊富な専門知識を持つことが要求されている。

そうした学生を育成するための品質保証の源となるカリキュラムとして、例えば危機管理学部では、1年次の必修科目として「救急救命実習」があるほか、多様な共通基礎科目を通じて学生は危機管理の基本的な素養を身に付けていく。また、本学は千葉県銚子市を中心とした地元の強い要請を受けて開学した背景もあり、地域との連携を図り地域産業の振興と地域文化の発展への貢献、そして地元の安全・安心な社会・街づくりへの貢献が期待されている。そうした中、本学は、実際の消防自動車・救急車をいながら地元との連携も踏まえた実践的な教育を当初より行なってきた。その蓄積により、消防官の所属学生数あたりの合格者数や就職率で毎年のように全国1位となる等の実績を示してきた。

これらの背景には、学園の「建学の理念」にある『ひとりひとりの 若人が持つ能力を 最大限に引き出し 技術者として社会人として 社会に貢献できる人材を養



図1. 広村堤防



図2. 梧陵濱口君紀徳碑

成する』、そして、この理念を踏まえた本学学則の中にある『本学は、健康で安全・安心な社会の構築に寄与できる人材の養成をすることを教育目標とし、それらの探究を研究の目標とし、地域と共生する大学づくり、平和で文化的な地域づくりへ参画することを社会貢献の目標と定める。』と示していることがある。本学では、このような「建学の理念」と学則の下、薬学部、危機管理学部、看護学部の分野・機能別に、危機にあっても持続可能な社会を支えられる人材、グローバルに考えて「地域」で活躍できる人材を育成している。本学の地域志向に関する実践的な取り組みを以下に紹介する。

- ①地域志向の学生団体：学生消防隊（2007年8月に銚子市消防団と本学学生消防隊が「地域防災強化に関する覚書」を締結し、地域支援・災害支援活動を実施し、地元消防団機能の補完を果たすまでになっている）、スターラビッツ（地域社会の安心、安全を確保するため銚子警察署・防犯協会と連携して防犯パトロールを行う学生警察支援サークル。銚子警察署は日本で最初の警察署におけるインターシップ実施）、リトルスクール（教育支援サークル）、救急救命士を目指している学生で組織された部隊等の、地域志向の学生団体により積極的な活動が行われている。医療系学生も一体となつての災害医療やマラソン大会等での支援、海上保安部との協力関係構築等を積み重ね、台風襲来時や東日本大震災時の市役所・市民と連携した災害支援、近隣（旭市）被災者の救援活動等々を含め、地元地域との連携活動を蓄積してきた。こうした組織での活動経験は、学生のキャリア形成に資するだけでなく、実際の就職活動にも大きな力となっている。
- ②地域志向の郷土教育の実施：「銚子ジオパーク」認定への貢献、認定後の「銚子ジオパーク推進市民の会」に対する地球科学基礎教育の実施、ガイド養成等の運営支援、銚子市教育委員会と連携した小・中学校への理科学習支援等の実施などが挙げられる。学校教育・生涯教育において、ジオパークを本格的に活用している実践例が日本ではほとんどないが、小・中学校の児童・生徒を対象とした学校教育、地域住民を対象とした生涯教育において、銚子ジオパークをテーマとした科学リテラシー教育、理科教員を目指す学生の参画、銚子市中心部に設置した「千葉科学大学エクステンションセンター」における夕方から夜間にかけての地域特性をテーマに取り入れたサイエンス・カフェの運営や地元の小学生・中学生を対象とした教育支援ボランティア活動等がある。
- ③地域志向の防災教育及び地域防災力の強化：銚子市の「防災まちづくり」の推進への貢献として、市民対象の「防災士」養成講座等を開催し、「防災リーダー」の養成を継続している。また、本学危機管理学部生自体

が、必修授業「消防と防災」の受講により防災士認定試験の受験資格が与えられ、ほとんどの対象学生が資格取得している。2013年度には、市民1人ひとりの防災の「気づき」を獲得することを目的として、災害に対する弱点を発見するためのイメージトレーニング手法の開発・実践を行ったが、学生と市民が町内会をはじめとして一緒に話し合い共通体験を行うことで、学生のコミュニケーション能力の向上にも役立っている。また、地域における自助、共助の中核である銚子市消防団による、機能別消防団の設置（2012年）、第11分団の設置（2015年）に本学学生が積極的に参加し、学生・女性ならではの機能を発揮して、地域防災力強化の一助を担う、全国でも珍しい消防団組織がある。

- ④科目「銚子学」の新設：講義だけでなく、まち歩きや地域住民と連携したボランティア活動の実施を含む共通基礎科目の設置により、学生は地域に共通する自然・環境や歴史・伝統・産業などの「恩恵」を知り・学ぶことで郷土に対する愛着・誇り（人・地域を守りたいとの意識）を醸成すると共に地域全体で解決すべき「脅威」としての自然災害等に対して、多様な主体が協力・連携して課題解決を図る（実際に人・地域を守る）ための知識とスキルを獲得するものである。

上記の取り組み等を通じて、実際に学生は地域の中で育ち、地域のため・社会のために行う活動が地域の中で評価されることで鍛えられ、それは出身地域に戻り就職する学生にとっても、ここで培われた社会人基礎力とコミュニケーションスキルはその後のキャリアアップに繋がっている。さらに、これらの取り組みを継続・発展させるため、文部科学省の平成26年度地（知）の拠点整備事業（COC; Center of Community）に対して、銚子市をはじめとする地域の複数の機関・団体等とともにプロジェクト「防災・郷土教育を積み上げた、人に優しく安心して住める地域創り」を申請し、採択されている。

以上見てきたように、本学の地域志向に関する取り組みの方向性は、濱口梧陵の、防災・防疫等の面での功績だけにとどまらず、地域に対する社会的貢献の考え方や行動とも合致していると言えよう。

4. 過去の災害等を後世に残す仕組み ～濱口梧陵を題材にした取り組み～

過去の大きな災害や事故及びその教訓を後世に残す方法には、口述や朗読・劇等による継承、絵画、文章（記事・文献・教科書・書籍等）、紙芝居、電子メディア（映像等）、被災現場や事故の原因物体等を「動態保存」、訓練、記念日として継承、事故や災害を映画等にフィクション化する、「ぼうさいカフェ」等々がある。

実際の例をいくつか挙げると、日本最古の津波の記録は「日本書紀」であり、「天武天皇13年（684年頃）“大

潮高く騰(あ)がりて、海水(うなつみ)瓢蕩(ただよ)ふ」と記載⁴⁾されており、その後も日本三代實録に平安時代869年、山陸大津波の最古の記録が掲載、あるいは安政大地震の当時の絵は江戸東京博物館を始め各地で保管されているなど、まずは文章や絵画によって、過去の記憶が継承されてきた。訓練による継承では、三陸海岸で「訓練大津波」として東日本大震災の前から継続して行われてきたし、大きな事故を経験してきた鉄道業界ではJR東日本が「事故の歴史展示館」を自社の研修センターとして設置、動態保存では、死亡事故を起こした六本木ヒルズ大型回転ドアが埼玉県毛呂町の三和タジマ施設内に設置していることをはじめ、東海村JCO臨界事故では原子力科学館のレプリカを設置や、最近では東日本大震災時の被災建物や小学校の保存を巡っての議論なども含め、多くの例がある。内閣府による各地での「ぼうさいカフェ」という取り組みの中で総合的に継承していく形もある。近年は、ビデオカメラやスマホなどの電子機器・電子媒体の急速な進歩により、多くの記録がなされることで、後世に検証や対策づくりの上での大きな貢献が進んでいる。

濱口梧陵の場合は、「稲むらの火」という不朽の防災教材として、昭和12年から10年間、小学国語読本(5年生用)に掲載されたことで有名になった。元々はラフカディオ・ハーンの“A Living God(生き神様)”という作品で紹介されたことを契機に、この話の真髄を小学生にもわかるようにと中井常蔵(南部小学校教員)が昭和9年に文部省の教材公募に応募して入選した作品である⁵⁾。

神話を題材にした防災教材の観点からは、出雲神話「スサノオとヤマタノオロチ」を用いたものがある⁶⁾が、「稲むらの火」は実際の史実を事例にしていること、実際の堤防が残っており実際にその後の津波からの被害を押さえた事実などから、説得力のある教材と言える。

内閣府防災担当では紙芝居「津波だ！いなむらの火を消すな！」をサイトに公開し、広く一般にも啓蒙をしているが、企業等でも、社団法人日本損害保険協会がいなむらの火を防災教材としてビデオ化し貸し出しを行っているほか、損保ジャパン日本興亜では2003年6月に「人形劇プロジェクト稲むらの火」を立ち上げて以来、全国各地で1万人以上の親子を対象に公演を行い、命の大切さと地震・津波が生じた時の心得・心構えを啓発するなどの活動が継続的になされてきた。

シンポジウムという形式は、聴講者が実施建物の収容人員数に制約されたり、主に近隣からしか集まらない等のデメリットはあると考えられるが、濱口梧陵をテーマにしたシンポジウムは幾度も各地で行われてきた。しかし、本学のある銚子、濱口梧陵との関係が深い当地銚子では、今まで史実等にフォーカスして関連した様々な研究会や発表会等の催しを実施されてきたものの、濱口梧

陵の人物と史実を中核にした上で、津波対策や感染症対策等をテーマとするシンポジウムは開催されていなかった。

濱口梧陵を取り巻く偉人、例えば関寛斎(銚子の洋方医、銚子のコレラ予防のために江戸で技術を修得し、銚子のコレラ防疫に尽力)は、戊辰戦争で敵味方、軍人住人の区別なく看護を尽くし、日本の赤十字事業の先駆とされていることから、ちょうど千葉科学大学ではこの年に看護学部が開設されていることもあり、赤十字と看護学部というように、ますます本学と銚子、濱口梧陵との関係の強さを著者らは感じていたことを付記しておきたい。

5. シンポジウム開催までの経緯

まず、シンポジウム開催に向けての情報収集のため、濱口梧陵の生誕地である和歌山県広川町(当時の紀州広村)を2014年10月5日に訪問した。現地に到着後、広川町教育委員会・教育長の松林 章氏、東濱植林株式会社・常務取締役の塩路信兼氏、郷土史家(「稲むらの火」語り部)の白岩昌和氏と意見交換を行った。

その後、現地視察として、東濱公園(濱口梧陵の西濱口家と兄弟関係にある東濱口家の庭園、安政の津波跡あり)、広村堤防(濱口梧陵が私財を投じて建設した津波を防ぐための堤防、国指定史跡)、耐久社(濱口梧陵らが創設した文武両道の稽古場(私塾)、現在の耐久中学校・耐久高等学校の前身、和歌山県指定史跡)、濱口家住宅(東濱口家の住宅、国指定重要文化財、所有者：東濱植林株式会社・広川町)、稲むらの火の館(濱口梧陵記念館と津波防災教育センターから構成されている)、濱口梧陵墓(国指定史跡)、広八幡神社(境内に梧陵浜口君碑がある)などを訪問した。その際、ガイド役として、郷土史家の白岩昌和氏に同行いただいた。なお、稲むらの火の館では、館長の崎山光一氏とも意見交換を行った。

現地訪問の後、著者らによる数回の会議を経て、シンポジウムの内容(構成)、日時、場所などを決定した。まず、シンポジウムの内容(構成)については、先行事例である2013年10月26日開催(場所：明治大学駿河台キャンパス)の「濱口梧陵シンポジウム～和歌山県が生んだ津波防災の先覚者～」を参考にした。これは、濱口梧陵の功績を顕彰するシンポジウムであり、和歌山県と明治大学の主催により開催されたものである。その内容は、河田恵昭(関西大学教授)による“基調講演”「濱口梧陵の意志を風化させない減災対策」の後、大下英治(作家、『津波救国〈稲むらの火〉浜口梧陵伝』を執筆)、中林一樹(明治大学特任教授)、仁坂吉伸(和歌山県知事)、石丸謙二郎(俳優、TBSドラマ「JIN」において濱口梧陵役で出演)を交えた“パネルディスカッション”により構成されていた。

本シンポジウムでは、防災(津波)だけでなく防疫も扱うことから、議論のテーマが散漫となってしまうこと

が懸念されたため、“パネルディスカッション”は実施せず、“講演”のみを中心とする内容（構成）とすることにした。これを踏まえて、さらに、講演の前半部のテーマは、濱口梧陵の功績（防災・防疫を含む）を顕彰する内容、講演の後半部のテーマは、防災（津波）・防疫（感染症）の知識・対策を学ぶ内容とすることとした。

上述のテーマを考慮して講演者の人選を行い、次の通りに決定した。まず、基調講演として、西濱口家の第12代当主であり、現在のヤマサ醤油株式会社・代表取締役社長の濱口道雄氏に、濱口家の教育（家訓）に関する講演を依頼した。招待講演として、和歌山県広川町の郷土史研究家であり、「稲むらの火」語り部でもある白岩昌和氏に、濱口梧陵の略歴・功績に関する講演を依頼した。さらに、学内からは、戸田和之准教授に防災（津波）に関する講演を、吉川泰弘教授に防疫（感染症）に関する講演を、それぞれ依頼した。

つぎに、シンポジウムの開催日については、当初、「津波防災の日」である11月5日（「稲むらの火」のモデルとなった安政南海地震の発生日に因んで制定）の前後を予定していた。しかし、本シンポジウムの開催趣旨として、防災だけでなく防疫も対象としていることから、防災（津波）だけに特化した開催日は望ましくないと考えた。その上で、千葉科学大学は、2011年3月11日の東日本大震災の地震・津波によって人的被害は免れたものの甚大な物的被害を受けたこと⁷⁾、1945年3月9日の銚子空襲において死者47名を生じていること⁸⁾、といった災害に関する事実（記憶）を忘れない意味を込めて、シンポジウムを3月上旬に開催することに決定した。

最後に、シンポジウムの開催場所については、当初、映像・音響設備が整っている千葉科学大学の講義室（収容人数：340人程度）を利用する計画であった。しかし、その後の議論の中で、旧・公正市民館（現・中央地区コミュニティセンター）は、濱口梧洞（西濱口家の第10代当主）が1926年に建設した社会教育施設であること、また、この建物が鉄筋コンクリート造であったため、1945年7月の銚子空襲で奇跡的に焼け残り、臨時病院として使用されたことを知るに至った。そこで、今後、この歴史的建造物を有効利用する意味を込めて、開催場所を旧・公正市民館に決定した。

6. シンポジウム開催結果

以上の経緯を経て、「濱口梧陵シンポジウム～銚子の偉人から防災・防疫の教を学び、将来の危機に備える～」を開催した（日時：2015年3月8日（日）13時～16時、場所：中央地区コミュニティセンター）。図3は、関係各所に配布した案内状（チラシ）である。主催は千葉科学大学であり、後援は千葉科学大学COC拠点整備事業推進協議会である。

濱口梧陵シンポジウム

～銚子の偉人から防災・防疫の教を学び、将来の危機に備える～

濱口梧陵（ヤマサ醤油第7代当主）は、1820年、紀州広村（現・和歌山県広川町）で生まれ、12歳のとき銚子に来ました。1854年の安政南海地震の大津波での梧陵の功績は、津波防災の逸話「稲むらの火」として現在まで語り継がれています。また、1858年に江戸でコレラが大流行したとき、濱口梧陵は銚子でのコレラ防疫に尽力しました。また、大火により焼失した西洋種痘所（後の東京大学医学部）の再開のために300両を寄付しました。

銚子の偉人である「濱口梧陵」の防災・防疫の功績から教を学び、将来の大規模災害・感染症の大流行に備えるきっかけとしませんか？



銚子市内の「梧陵濱口君記念碑」

日時 2015年3月8日（日）13時～16時（開場：12時30分～）

場所 中央地区コミュニティセンター2階（旧・公正市民館、千葉県銚子市新生町2-1-5）
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。

プログラム

開会の辞 赤木靖春（千葉科学大学 学長）

開会挨拶 濱口道雄（ヤマサ醤油株式会社 代表取締役社長）

基調講演「濱口家の家風・教育について」 濱口道雄（ヤマサ醤油株式会社 代表取締役社長）

招待講演「濱口梧陵の防災・防疫の功績 一いのちを語り継ぐ為の「孝」と「仁」」 白岩昌和（郷土史研究家、「稲むらの火」語り部）

講演「銚子の津波防災」 戸田和之（千葉科学大学 准教授）

講演「感染症について学ぶ」 吉川泰弘（千葉科学大学 副学長・教授）

総括・閉会の辞

※当日の演題に変更のある場合があります。

問い合わせ先：千葉科学大学 学外連携ボランティア推進室
TEL: 0479-30-4581 メール: RENKEI@ml.cis.ac.jp

参加申し込み方法：「問い合わせ先」の電話番号またはメールアドレスに、参加者の「お名前」、「連絡先」、「ご住所」をご連絡ください（申し込み期限：2月27日（金））。**参加者全員に、冊子「濱口梧陵物語」を差し上げます。（参加無料、定員100名）**

主催：千葉科学大学 後援：千葉科学大学COC拠点整備事業推進協議会

図3. シンポジウム開催の案内状（チラシ）

シンポジウムの内容（構成）は、以下の通りである。

- ・開会の辞：木村栄宏（千葉科学大学 教授）
- ・開会挨拶：赤木靖春（千葉科学大学 学長）
- ・来賓挨拶：越川信一（千葉県銚子市 市長）
- ・基調講演「濱口家の家風・教育について」：濱口道雄（ヤマサ醤油株式会社 代表取締役社長）
- ・招待講演「濱口梧陵の防災・防疫の功績一いのちを語り継ぐ為の「孝」と「仁」」：白岩昌和（郷土史研究家・「稲むらの火」語り部）
- ・講演「銚子の津波防災」：戸田和之（千葉科学大学 准教授）
- ・講演「感染症について学ぶ」：吉川泰弘（千葉科学大学 副学長・教授）
- ・総括・閉会の辞：藤本一雄（千葉科学大学 教授）

シンポジウムの様子を図4に示す。参加者は、計207名であり、そのうち千葉科学大学の関係者は22名であった。当初は、定員100名を見込んでいたが、それを大幅に上回る参加者であった。

本シンポジウムの成果を把握するため、シンポジウム終了後に参加者へのアンケートを行ったところ、63名から回答が得られた。アンケートの結果を図5に示す。問1：本シンポジウムを知ったきっかけについては、銚

子市の広報紙「広報ちょうし」が最も多く(24名)、次いで、銚子市の地元紙「大衆日報」(16名)であった。問2:シンポジウムの内容(レベル)については、「適切」が49名で全体の約8割を占めていた。問3:シンポジウムに関する意見・感想としては、ほとんどが肯定的なものであった。しかしながら、会場の整備不良に対する指摘や講演内容の一部重複を指摘する声もみられ、今後の反省材料としたい。問4:千葉科学大学が地域と連携して取り組む「防災」「防疫」に関する活動への参加・協力への意向を尋ねたところ、「ぜひ参加・協力したい」と「できる範囲で参加・協力したい」との回答が全体の9割以上であった。

なお、本シンポジウムの終了後、報告書300冊を作成し、銚子市内の機関・団体(ヤマサ醤油株式会社、銚子市役所、銚子消防本部、銚子市消防団、銚子海上保安部、銚子警察署、銚子商工会議所、銚子青年会議所、銚子市町内会連合協議会、銚子市社会福祉協議会、銚子信用金庫、銚子商工信用組合、ヒゲタ醤油株式会社など)なら

びに和歌山県広川町(広川町教育委員会、東濱植林株式会社、稲むらの火の館など)に配布した。

また、当日のシンポジウムの様子は地元の銚子ケーブルテレビでニュースとして配信されるだけでなく、ヤマサ社長の講演をはじめそのまま講演録として放映されることで、シンポジウムに参加できなかった市民にも広く知らしめることが可能となった。

7. まとめ

本シンポジウムを企画した時点では、文部科学省による平成26年度地(知)の拠点整備事業(COC事業)に対して、本学のプログラム「防災・郷土教育を積み上げた、人に優しく安心して住める地域づくり」を申請中の段階であった。COC事業としての採択に関わらず、本シンポジウムは地域にとつての意義が大きいと自負して準備を進める中でCOC事業の採択が決まったため、本シンポジウムはそこからの資金的補助は無いもののCOC事業の一環として位置づけ、本学と地域の結びつきを深め



図4-1. シンポジウムの様子(開会の辞)



図4-2. シンポジウムの様子(来賓挨拶)



図4-3. シンポジウムの様子(基調講演)



図4-4. シンポジウムの様子(講演)

るとともに、地域への社会貢献活動の一つとして実施できたことをうれしく思う。

なお、国家を守る4つの「防」として、防災・防疫・防犯・国防が挙げられるが、今回のシンポジウムでフォーカスした防災・防疫だけではなく、濱口梧陵は実はそのすべてに対して功績がある。濱口梧陵は、外国船の来航が頻繁であることを受けて、「国防」の必要性を強く感じて、1851年に広村崇義団を創設している。また、1854年の安政南海地震の際、津波からの避難によって空き家となった民家で盗難や火災が発生しないよう、30人程度を3つに分けて、村内や海辺を巡視させており、「防犯」に対する意識も高かったことが伺える。千葉科学大学の危機管理システム学科には、「自衛官・安全保障コース」(国防)(2015年度より)と「警察官・犯罪科学コース」(防犯)(2014年度より)も設置されており、濱口梧陵の功績と本学の教育研究方針は、この意味でも類似していると言える。

謝辞

本シンポジウムは、平成26年度千葉科学大学教育研究経費の補助を受けて実施したものである。記して謝意を表す次第である。

参考文献

- 1) 戸石四郎：津波とたたかった人－浜口梧陵伝－、新日本出版社、188p、2005.
- 2) 大下英治：津波救国－〈稲むらの火〉浜口梧陵伝－、講談社、322p、2013.
- 3) 高木まさき(監修)：時代を切り開いた世界の10人 第10巻 浜口儀兵衛、学研教育出版、143p、2014.
- 4) 伊藤和明：津波防災を考える「稲むらの火」が語るもの(岩波ブックレット)、岩波書店、2005.
- 5) 気象庁：「稲むらの火」と史蹟広村堤防、西太平洋地震・津波防災シンポジウム、2003.
- 6) 佐藤 健・佐藤喜代・戸田芳雄：出雲神話「スサノオとヤマタノオロチ」を用いた防災教材に関する研究開発－自然の災害と恩恵の二面性からの追究－、安全教育学研究、第14巻、第1号、pp.27-37、2014.
- 7) 千葉科学大学：千葉科学大学震災記録：2011年3月11日東日本大震災、36p、2011.
- 8) 銚子市役所企画調整部市史編さん室 編：市民の記録 銚子空襲、678p、1974.

問1 このシンポジウムをどのようにしてお知りになりましたか（〇はいくつでも）

1. 広報ちょうし（24名）
2. 大衆日報（16名）
3. 銚子よみうり（4名）
4. 千葉日報（1名）
5. 銚子テレビ（1名）
6. チラシ（14名）
7. その他（24名：ヤマサ社内メール（7名）、ジオパーク推進市民の会（3名）など）

問2 シンポジウムの内容（レベル）はいかがでしたか（〇は1つだけ）

1. 適切（49名）
2. 少し易しい（5名）
3. 少し難しい（7名）
4. その他（0名）

問3 このシンポジウムに関しての具体的なご意見・ご感想をお書きください。（一部抜粋）

- 防災を考える時期として（3/11）適切なシンポでした。地元の防災が良く分かりました。
- 今まで知らなかった事が多くあった。銚子に縁のある方が、たくさんの社会に貢献したことを知って良かった。
- 防災士の資格をとりましたが、今後ともたびたびシンポジウムを実施して下さい。市民の関心が薄い。
- 具体的なデータに基づいてのお話は大変切実であり、緊張感を持って聞けました。準備を改めてする事と思います。素晴らしいお話でした。
- 戸田先生の講演は判り易く大変参考になりました。他3題はあらためて濱口梧陵の偉大さを実感させられました。
- たいへん勉強になりました。このような研修会を今後とも開催して下さい。
- 参加して重要な内容を知り得て良かったと思います。
- 過去からの話と3.11の体験など、多方面からの講演となり、大変面白かった。
- 地元由来の偉人、子供達に伝えたいと思いました。震災後、分かっていたけど何も準備していません。改めて考えさせられ、帰ったら準備します。
- こんな充実したものは少ないと思う
- 梧陵さんの生き方などいろいろ良い話でした。津波のマップ参考になり防災に役立ってます。
- 梧陵さんの話を中心に、防災、防疫などをうまくまとめられていた。
- 濱口梧陵さんがこんなに立派な方とは知らなかったです。ヤマサの方は公民館、公正学校等と地元の人達に力をつくされた方と良く知りよかったです。
- 多くの市民の方々が集まりおどろきでした
- 公民館で講演を聞くことができて、ありがた味が倍增しました。大学の先生のお話は特によかったです。日曜などに大学でこのような受講ができればいいと思いました。
- 動機付けとして偉人濱口梧陵を市民が知っている点、恵まれているエリアと思います。
- まず、館内が寒くてきつかった。講演の内容はとてもわかりやすくて良かったです。
- この会場を管理している者に申し上げたい。ヤマサさんの寄贈のこの建物、こんな維持の仕方で申し訳ないと思うよ。折角のシンポジウム、ヤマサの社長さんも来られているのに、カーテンの状態、両サイドのゴムテープ止、等見苦しい。先生方にも失礼だよ。
- 内容がかぶっていた所が非常に多かった。

図5-1. アンケートの結果（その1）

問4 今後、千葉科学大学が地域の皆様と連携して取り組む「防災」や「防疫」に関する活動があれば、参加・協力したいと思いますか。

1. ぜひ参加・協力したい (20 名)
2. できる範囲で参加・協力したい (38 名)
3. あまり参加・協力できない (3 名)
4. その他 (1 名)

問5 その他に、ご意見・ご要望がありましたらお書きください。(一部抜粋)

- 梧陵生誕 200 年 (2020 年) 何か行事 (イベント) を計画してほしい。和歌山と銚子の交流をもっとやるべきだと思う (特に防災等について)。
- 地震、災害の情報はテレビで見る限りで、本当に知らない事が多い。また、機会がありましたら、多くの市民に聞かせたい事です。ぜひ聞いて下さい。銚子のゆかりの人々の関連性がわかり易くお話を聞きました。ありがとうございました。
- 地震・津波の話、再認識しました。今日はありがとうございました。ヤマサさんの話、銚子に育った者として、当時の暮らしと友達そして地域を懐かしく思い出しました。
- 戸田先生のお話がとても分かりやすく良かったです。吉川先生の講演もおもしろく、興味深く拝聴出来ました。
- 稲むらの火の話は物語であって実際とは異なる安全対策上周知が望ましいのであえて真実は知らせとしていないが本当の事も知っておく事も必要である (稲むら→ススキ、燃やしたのは暖を取る為の筈)
- 今後もこのようなシンポジウムがあれば参加したいと思います。
- 明日は我が身といつも認識し、お互いに共助の精神を持ち合える社会になればと考えます。梧陵の件をもっと銚子の町を上げて全国的に PR しては町おこしにならなくても?
- 大切なお話ありがとうございました。各講師の方々、梧陵さんの偉大さに感動。津波も病気も知ることが大事、聞いて良かった。今日帰ったら家族に話す。
- 防災防疫は身近な事で大事ですので知っておきたいです。前期高齢者ですのでくりかえしくりかえし聞いたりしないと忘れてしまいますので。
- 銚子市でいえば、これまで梧陵さんや庄川さんをはじめ、たくさんの先人達に助けられてきました。それらは忘れることなく、これからは自力自助、近隣助け合いの気持ちで、天災 etc を生き延びることができればと思います。津波防災のお話は為になりました。
- このようなシンポジウムは 1 回/年くらいあった方がよい
- 時間の調整をもっと計画的にしてほしい。勉強になりました、ありがとうございました。
- 4 時間の講演、限界ですね。時間内で又はそれ以内で終了すると良いですね!
- シンポジウムの方針 (方向性) は何でしょうか?
- 予定時間のオーバーが長かったことが唯一残念なことです。
- 時間が長かったと思います。

図5-2. アンケートの結果 (その2)